

コレット・ポーヌ著

阿河雄二郎・北原ルミ・嶋中博章・滝澤聡子・頼 順子訳

『幻想のジャンヌ・ダルク』

——中世の想像力と社会——

昭和堂 二〇一四・三刊

A5 四八八頁 六〇〇〇円

おそらくジャンヌ・ダルクは、西洋史上最も有名で人気の高い女性であろう。それだけに、歴史上のジャンヌに関しては微に入り細をうがって調査が尽くされてきた。ペルヌーの精力的な研究は、その決定版といえる。もはや中世史においてジャンヌ研究の余地はどれほど残されているのか、という問いに、鮮やかな解答を出したのが、二〇〇四年に出版された本書である。

著者は、主著 *Naissance de la nation France* で知られる、中世後期フランス政治思想史家である。本書の原題は単に『ジャンヌ・ダルク』。構成はジャンヌの生涯の時系列に沿って、村での生い立ち、シャルル七世宮廷への登場、一四二九年の活躍、そして処刑裁判からジャンヌ死後の（異端宣告の）無効裁判へ、という四つの部分からなるが、オーソドックスな伝記ではない。

ポーヌが扱うのは、ジャンヌの生きた一五世紀における、ジャンヌの多様で錯綜したイメージである。ジャンヌを迎え入れたオレアン＝アルマニャック派と、敵方ブルゴーニュ派との間で、ジャンヌへの見方が違うのは当然であるが、見る者が聖職者か俗

人か、宮廷人が民衆かによってもずれが生じる。さらに一五世紀の間でも、政治的・宗教的状况の変化を反映し、ジャンヌのイメージは変容するのである。

とりわけ興味深いのは第II部であり、後世の人間にとって最大の謎である、なぜジャンヌが出現し受け入れられたのかという問題が、中世後期に様々な形で流布していた救済待望の思想、預言者のイメージから解き明かされる。ペスト、戦争、教会大分裂に苦しむ社会では、王や教皇に神のメッセージをもたらす預言者が幾人も出現しており、その中でも国境地帯の出身で貧しく純真な処女は、女預言者のモデルに合致していた。さらに人々は、ジャンヌに聖なる羊飼いのイメージを重ねようとする。

しかし一方で、ジャンヌが提示した自己イメージは、そうしたモデルには収まり切れなかったことも明らかになる。ジャンヌは確かに預言者として登場したが、男装して戦いに加わることで、預言を自ら実現しようとしたのだ。女戦士のモデルも、伝説や物語、歴史の記憶の中に皆無だったわけではないが、ジャンヌは女預言者かつ戦士という新しい人間像を打ち出した。ジャンヌが自ら「乙女」と名乗っていくのは、成人女性の規範に縛られない独自の存在であるという主張なのである。

この他にも、第一章では王・王位の聖性について、第五章では奇跡と魔術・呪術についてなど、知的エリートから民衆までが関わる広範な問題が考察され、興味は尽きない。つまり本書は、ジャンヌ・ダルクのイメージから、中世後期の政治社会、思想世界を描く歴史叙述であり、ジャンヌという存在を一五世紀の世界

のなかに納得のゆくように位置付けている。

(畑奈保美)